

感想文（公演見学記）に対するご返事

相模里神楽 垣澤社中・垣澤瑞貴

はじめに

公演終了後、実行委員会さんから来場者から感想文が揃ったら感想文に対する感想文を書いてください、というお知らせを頂戴しておりました。そこで、時々、アップされた感想文をフォローしてきました。

アップされた感想文、読ませていただきました。「書いていただいた内容」は、私たち神楽社中の「現住所」。これからの方向性について、ご示唆いただいたものと理解しました。2、000円というお代金を払っていただいたお客様の感想と接することが出来たこと、大きな励みとなりました。

私事ですが、公演後は、疲れが尾を引きました。体力の回復に予想以上の時間がかかってしまいました。疲れの原因は、およそ2年間、ずっと9月9日公演のための計画を練り上げ、稽古を続けて来たからだ、と考えています。私自身がこれまで習得してきたもの全てを盛り込んだ舞台であったから、この疲れは当然と、自らを納得させていました。

公演準備のために公民館、体育館で重ねた稽古回数は今年に入ってから、合計で31回。振り返ると驚きの稽古回数です。毎週の稽古でした。家元（父）とともに垣澤社中を支えてくださった座員（社中の神楽師）の皆様深く感謝しているところです。主催団体であります、実行委員会並びにご来場者の期待に応えようと努力した結果、垣澤社中の里神楽の伝承はより確かで逞しいものになりました。

感想文の感想について

さて、江戸里神楽公演学生実行委員会のウェブサイト「新着情報」という欄がトップページにあります。①9月26日付②10月9日付③10月24日付④11月12日付⑤11月25日付で七名の皆さんからの公演感想文がアップされています。

実行委員会からの情報では、①～④までの方々は公演に複数回ご来場、とのこと。アップ終了宣言後に追加された⑤の三名の方々は、初来場の学生さんとのことでした。したがって、感想の内容は、自ずと異なるだろう、ということでした。公演の感想は、誰もがお持ちでしょうが、それを文章にすること、さらにウェブ上に発表するとなりますと、ハードルが上がります。七本の感想文がアップされてことは、すごいことだ、というのが実行委員会の見解でした。

①トップバッター・K.Nさん（神川町）

私たちの神楽は、常に地域の方々と祭りという名の舞台で関わりながら、発展してきた土着の芸能です。だから私たち神楽師にとって、一番大事なことは「地域の皆様」にどう求められているのか、という問いと回答だったと思ってきました。9月9日の公演では、ご来場された方々の多様な求めに対して、いろんな方面から叶えてみようと考えました。ご覧になった方々がびっくりするような展開も考えていました。多様な期待に垣澤社中らしく応えたい、という思いがあり、それが上手くヒットしたので大変うれしく思っています。

「楽しくて、わかりやすい」という言葉がぴったりの公演であった、と評価された理由の一つには、やはり『公演解説プログラム』の力が大きいです。当日、舞台を見ただけではしっかりと思い出せない事柄や舞台当日にご提示できなかった神楽情報がすべてプログラムに込められている、そんな効果があったのでは、と思っています。

私たちは舞台上で演じ切ったわけですが、その場で消えていく性格のものです。時間芸術という言葉がありますが、公演時間が過ぎれば、消えていくものです。その公演成果を盛り立てる要因にこの印刷物が担っていた、と私たちも思っております。公演記念品として、いつまでも大事にされるプログラム。それを見る、読み返すことで、いつまでも9月9日公演が輝かしい公演であったという記憶をお客様が持ち続けて下さる。私たちにとっても、嬉しく意義ある刊行物だと思っています。

②M.Kさん（さいたま市）

「見せる」「楽しませる」神楽でありたい、という私たち社中の思いがきちんとお客様に伝わっていることができ、とてもうれしく感じました。神楽は日本のオリジナルの芸能の一つだと言われていています。神話は各国にあります、それをどう表現するかは国や文化によって異なると思います。神話には意味があって、古代の人が作った物語ですがそこには祖国のアイデンティティが必ず詰まっていると私たちは信じて舞台に立っています。私たちが神話を題材としている神楽を継承していく、その意味、あるいは意義を私たち神楽師もいつも探しながら演じております。

③K.Tさん（所沢市）

「神楽がもっとも輝く」場所、それはこんなご時世であっても神社の祭礼のなか、拝殿や神楽殿が一番です。綿飴の匂いにつられ、焼き鳥の甘いタレに惹

かれ、たこ焼きの香ばしさに心が躍った小さいころの記憶が、私のミーム（文化遺伝子）に深く刻まれているからだと思っています。

さいたま芸術劇場にご来場の皆様に、お祭りという時空に輝きを放つ神楽の世界を擬似的であっても体感してもらいたい、そう思って小ホール舞台に「祭りの雰囲気」持ち込んでみました。客席通路を舞台（花道）に、芝居を意識した神楽の演出、これは私たち垣澤社中のチャレンジでした。賛否両論。ご意見はあると思っておりますが、あれこれと話題になっていかないことには、神楽芸は面白くなっていかない、と思っております。これからもたくさんの挑戦をして、「記憶に残る社中神楽」でありたい、という想いで精進したいと思っています。

ところで新作神楽、新作面芝居に挑戦したのは、里神楽を演じる私たち、神楽師は断固として、衰退する芸とか保存される芸を継承しているわけじゃない。そのことをご来場者様にお伝えるためでした。二つの新作は、これからの垣澤社中神楽の十八番となるように、成長させていきたいと考えています。重陽の節供に御披露申し上げた新作は、やがては相模神楽らしい代表的な演目となっていくと確信しています。なお、新作は、古典を洗い直していく作業を通して創作するので、ある意味、もっとも素直に伝承されてきた神楽の文法に準拠している、とご理解してください。型を尊重しないと、型破りはできない、この公式は芸に関わる人たちの常識中の常識ですが、私たちもその公式から新作を生み出しました。

それから、『公演解説プログラム』についてのご感想もありました。このプログラムはずっと支えてくれた主催者側の熱意に根負けした私どもと共同で制作したもの。公演当日の朝、納品されてきたプログラムを手にして、とんでもないプログラムが刊行されたな、と思いました。このプログラムが、まさに我が垣澤社中の名刺（宣伝冊子）として、これから5年ぐらいは生き続けるだろうと思っています。

その間に、私たちはもっと成長、そして革新を遂げ、次のステップへ実行委員会の皆さんをお連れできるようにひたすら頑張っていきたいと思っています。

④K.Tさん（川越市）

私どもがお祭りで演じてきた里神楽は農耕文化と深い関わりがあるように思えます。どこか懐かしくて、温かくて、のんびりしている空気感を醸し出しています。里神楽を演じる場所と時間、そこにはやはり神様という神聖さが加わ

っているからだ、演者としては強く思っています。垣澤社中はこの空気感をとても大事にしていることを理解していただけて、嬉しく思っています。

「芸農」（農民の芸）という言葉が大変印象強い。そう言われてみますとその通りで、繰り返す単調なリズムや単調な舞地は、人の心をトランス状態にさせる作用があるのかもしれないです。里神楽が現代の人々にとっての祈りの芸能となるよう素質があること、失ってはいけない精神であることを気づかされました。

⑤I.R さん（立川市）

公演舞台を構成する軸として、過去・現在・未来というイメージを用意して、夕公演では、未来に繋ぐ新作を用意させていただきました。懐かしく、楽しかった経験が甦ったという感想はとても嬉しく感じました。戻っていく感じ、「戻す力」が神楽にはあると思います。戻りっぱなしじゃ困りますが、戻る力、戻す力がないと、前にも進みにくいかなと思います。神楽はノスタルジックなテイストを持つ芸能、そのような位置付けはとても重要だと考えています。民謡をモチーフに、創作性を競った踊りの思い出、とても参考になりました。

⑥T.S さん（立川市）

若い方に「素敵な出会い」と思ってもらえたこと、大変うれしい気持ちでした。9月9日公演で、何かに挑戦しようとした社中の心意気や、「人あつての芸能」という私たちの芸への真理（姿勢）を感じ取ってくれたことも嬉しく思いました。ご自身の生まれ育った地域の芸能を新しいフィルターで見直すことにより、今まで見えなかったものが急に見えるようになることは大変素晴らしいことです。同じものを見たとしても、それまでの過程を経て、初めて魅力的に映ることってたくさんありますから、これからもたくさんの「縁」を築いてほしいと思います。昔の思い出を思い起こさせるような芸能であることが神楽の根源です。「神楽は心のふるさと」とよく父（家元）は言っております。郷土芸能・民俗芸能とは、故郷を思い起こさせる母のような大きな存在なのかもしれないです。「楽しい」「わかりやすい」「親しみやすい」という印象を持ってもらえたことを伺い、私は「この公演は成功した」と確信しました。

⑦D.J さん（立川市）

お国が違いますが、お互いのくにながら（国柄）を伝える手段の一つに芸能があることは大変尊いことです。特に神楽は仮面黙劇で大変わかりにくいと言われてしましますが、日本語がわからない他の国の方々は、言葉は関係なく、素

直に神楽という「芸」を見てもらえている、そんなことを実感しました。

日本もまだまだ自国の文化や伝統にたいして、距離感が多大にあります。それでもこうして日本以外の国の方から称賛してもらえるならば、その期待をもっともっと大きくしていきたいと私は思います。日本で伝統にかかわるすべての人は、皆同じことを思っているはずです。

おわりに

江戸里神楽公演学生実行委員会主催の神楽公演に出演すると、公演の前後にも相当の時間を奪われる、という噂を聞いたことがあります。公演後の私の初仕事は、感想文を読み、感想文を戻すというご依頼でした。ありがたい機会だと思いました。見ず知らずの方々から寄せられた公演見学記を読み、返事を戻す経験はこれまでになく、忙しくも幸福な時間でした。「演じ手ファースト」という実行委員会の姿勢、こちらも消耗させられますが、神楽師の声を届けることが出来るので、頑張ってまとめました。不十分な点もあるからと思いますが、読んでいただきまして、ありがとうございました。最後になりましたが、感想文を寄せてくださいました皆様、ありがとうございました。

(2016・11・30)